

異端の三河武士

多岐川 恭



歴史小説
選書 11

人物往来社

異端の三河武士

多岐川 恭著

人物往来社 歴史小説選書 11

目次

異端の三河武士	五
叛臣	六
投げられた賽	八
腹中の敵	一九
異説慶安事件	二三
春の城	二八
末期の手記	三〇

異端の三河武士

異端の三河武士

一

於義丸おぎまるは十一歳になる。みじろぎもせず、人形のように正座している。顔立ちは、父の家康にあまり似ていないが、表情に乏しく、何を考えているかわからないところは、似ているとも言える。

脇に控えている石川数正かずまさは、よくこの少年を知らない。天正十二年（一五八四）十二月十二日に岡崎を発ち、二十六日に大坂に着いた。その間だけ、朝夕、於義丸に接したのだが、やはり無口で、子供らしい感情の表出がない。気むずかしかった。

独りでいるのが好きらしい。於義丸に付けられた勝千代（数正の子）、仙千代（本多重次の子）とも親しむ様子がない。にわか仕立てのお守り役なので、無理もないが、それにしても、いま少

し打ちとけてくれてもいいだろう。

よく肥えた、一見のんきそうな横顔をしているが、親の愛に恵まれないさびしさが、どこからかにじみ出ている。

於義丸は、家康と、彼の正室であった築山殿の侍女、お万の方との間に生まれた。伝えられるところでは、家康の手が付いて身重になったのを築山殿に知られ、裸にして縄をかけられ、浜松城の木立の中に捨てられていたところ、その泣き声を、殿居していた本多作左衛門重次が聞きつけて助け、自宅に連れ帰って介抱した。天正二年（一五七四）、城外の村で於義丸は生まれた。

お万の方は微賤びせんの女だったという。母子はほとんど家康にかえりみられなかった。長子の信康のぶやすが於義丸をいつくしみ、父家康との対面をさせた話は、よく知られている。信康が織田信長の命で腹を切らされてから、於義丸は世嗣のはずなのだが、ずっと日陰の子として育ち、いま、秀吉の養子になろうとしている。

於義丸は子供ながら、父に愛されていないことを知っているし、養子とは言え、実は人質であることも承知しているに違いない。そして、運命に従順でなければならぬのだと覚悟しているのだろう。

ふびんな若殿だと数正は思う。だが、彼が家康であっても、やはり同じことをするだろう。

於義丸は時々、目を動かす。部屋の様子が珍しいのだろう。大坂城内の修築は、ほぼ成っていて、さわやかな木の香が匂う。極彩色の天井やふすまも真新しい。三河の城で、このように壮大で美しい広間はない。勝千代たちでさえ、おびえたように小さくなっている。

服装も違う。出入りする若侍や小姓の服装は、あきれるほど華美だ。

秀吉は、近習を数人引きつれて部屋に入ってくると、

「於義丸、参られたか」

と言ひ、ニコニコ笑った。秀吉の服装も華美である。ただ、美服の上に載っている首がひどく場違いである。満面にシワを寄せて笑う。

「きょうから、これが」

と、秀吉は自分の顔を指さして言った。

「於義丸の父だ。顔を上げて、よく見覚えてくれ」

於義丸は、別に何も言う必要がなかった。数正は一応、於義丸と、勝千代、仙千代を簡単に紹介した。秀吉は徳川の重臣である石川、本多の息子が於義丸に付いたことを、非常に喜んだ。

「於義丸、母者と女房共に会わするぞ。そこで、うまいものを食って、茶を飲めや。仙千代らも参れ」

秀吉は接待の者と呼び、奥へ引き取らせた。於義丸は懸命に威儀を正そうとして、棒のように

なつて歩いて行つた。

於義丸にかわゆげのないことを、秀吉は少しも気にしている様子がない。機嫌がよかつた。

秀吉は数正ほか、三河から付いてきた家康の家臣たちをねぎらつたあと、数正だけを別室に誘つた。数正はかねてから、家康の家臣に疑惑の目で見られており、秀吉も知っているはずだが、無雜作に座を立てて行く。

数正も他の者に目礼して、秀吉に従つた。これでまた、彼等は疑惑を深めるだろうが、それならそれで構わない。こたわれば、秀吉に笑われそうだった。

連れて行かれたのは、日当りのいい、縁側のある部屋で、障子に庭の木の影が映つて、揺れていた。秀吉はくつろいであぐらをかき、運ばれた火桶にかじりついた。

「このまま、残つたらどうだ？」

と秀吉は言つた。

「一旦三河へ戻ると、出にくいぞ」

「そういうわけにも参りません」

と、数正は苦笑した。

「お役目を果して帰り、殿に、諸事無事に済みましたと申し上げなければなりません。女房、子供のこともあります」

「それは心配なからう。わしから徳川殿に言ってやればいい。石川伯耆守ほうぎのかみをわしの家来にするから、女房子供を送りとどけてくれとな。迎えにやってもよい。徳川殿も頑固がんこな男だが、そのうちに頭を下げてくる。そうすれば、お前がどっちに付いたところで、わしの家来になるのは同じことだ。そうだろう」

秀吉は愉快そうに言った。

「徳川殿は賢い人だ。お前の女房、子供、親類縁者を殺すことは万々ない。そんなことをすれば、合戦に及ばねばならん。いまのわしは、つい先頃の羽柴筑前はしばちくぜんではない。織田の殿様の亡きあと、明智も柴田も亡びた。武田も亡び、上杉は降参した。わしはな、数正、来年は紀州と四国を平らげる。それから九州、東国に兵を向ける。ここ二、三年のうちに、天下を平定するのだ。徳川殿が一人背そむいたとて、大勢の前には手も足も出ぬじやろう。徳川殿との合戦は苦勞なことだが、早晩は踏み潰つぶして、国は亡びる。いまのわしには、徳川殿も手を出されぬ。お前の親族も大事にしてくれよう。どうだ、残らぬか。そうせい」

「いや、一旦は帰ります」

と数正は答えた。

「片意地者ばかりで、戦いを望む者が多うございます。これをなだめて、和睦のことが全く整ったところで、岡崎を出たいと思っております」

「それもそうか」

と秀吉は簡単に同意した。

「徳川殿は大坂にあいさつに来そうもないか」

「はい、いまのところは。人質などを、他の諸侯と同列に出すことは家の恥で、そう申し越された時には一戦、と一同は考えております。殿も御同意のようです」

家康は前年、関東の北条氏直うじなおと和睦し、娘を嫁とつがせている。後顧の憂いを絶って、秀吉と対抗する姿勢である。もちろん、秀吉はそれを知っている。

「徳川殿は困っているのだらう、数正」

と秀吉は言った。秀吉の言葉の意味は、すぐ通じた。

「そのように見受けられます。このたびの、於義丸様ご養子の件では、とかくの論議もなく、殿が御承引でした。人質ということならば、むずかしかったと思われます」

「これから、そのようにせいと言うのだな。わしも考えていることはある。だが数正、養子は養子、人質ではないぞ、於義丸はわしの子として、十分に見てやる」

「ありがたいことでごさる」

「いい子じゃ。あれは徳川殿の幼い頃に似ていたか？」

「よくは憶えませんが……」

全く、それは遠い昔のことになっている。家康が竹千代と呼ばれる幼児であった頃、数正は常に側に付いていた。

思えば、家康の幼年、少年時代も不幸だった。成人するまで、駿河の今川氏の人質である。数正はそこで、竹千代がどのように成人して行ったかを知っている。少年にして、すでに大人の知恵を具えていた家康である。だれにも逆らわず、そしてだれにも、お側の数正にすら心を許さなかった。傷だらけの心を冷たく内にたくわえ、外貌はあくまでぼんやりして、時には放胆であった。内輪の者たちの間では我意を貫いた。

「なんとなく、似ておられます」

数正は自分に言い聞かせるように答えた。

「気宇は高うござる。あっぱれな大将になられましょう」

秀吉は満足そうにうなずいた。

「まだ年は足らんが、年の内に元服させるがいいな。名は考えてある。わしの秀と、徳川殿の康を取って、秀康。いい名であろうが。さし当って、河内で一万石を取らそう。戦いにも連れて行く。お前も早くこちらへ来て、付き添ってやれ」

「いや、それには勝千代、仙千代がおります。妙な因縁で、この数正は若年の時、竹千代様に付いて、駿河に行っておりまして。いまは息子の勝千代が、於義丸様に付いております。きっと忠

勤を励むよう、申し渡してございます」

「於義丸は少し元気がないが、そのうちにやんちゃ坊主になろう。もっと美々しいべべを着せて氣まましてやるがいい」

「親子の縁のうすいお子でございます。殿のご養子となられ、のびのびとご成人になりました。う。若殿のため、このたびのご縁組みはおめでたい限りでございます」

数正は本心からそう言った。その期待が持てるのは、養い親が秀吉だからである。養子は養子、人質でないというのは、秀吉の場合、屁理屈ではない。

二

石川伯耆守数正が、初めて秀吉と対面したのは、前年の天正十一年夏、秀吉が柴田勝家を攻め亡ぼした祝いに、家康から使者として派遣された時である。

秀吉は数正についてはよく承知している。歴戦の勇士で、敗軍を味わったことがない。その勇武は、金の馬蘭ばらんの馬印と共に、四辺に鳴りひびいている。

戦いでは、常に先頭に立って下知した。退くときは殿しんがりをあずかる。一軍の将が真先に出るのは、軽率のそしりを免まぬがれないだろうが、数正に言わせると、それが当然のことで戦いの勝敗はほ

とんど先鋒の働きによって決まる。いわゆる機先を制するのだ。それほど重要なので、先頭に立つ。生死を言えば、どこにいても死ぬ時は死ぬのである。このやり方は蒲生氏郷がもうけきこも同じであった。

数正は武将というだけではない。数代前から徳川に仕えた宿老の第一で、政務に明るく、家康の信任があつい。酒井忠次ただつぐとならんで家康を輔佐してきた。

兵学、築城の術にも明るかったのは、のちに秀吉から封ぜられた信州松本城の築城が、彼の設計指揮によるものであることから想像できる。

京都の陣内で、秀吉は率直に、自分に仕えないかと言いだした。そうすれば高祿を給すると提案する。

その時数正は、おどろいたばかりで、とかくの返答はしなかった。

徳川譜代の重臣であり、噂には聞き知っていたろうが、初対面の数正にむかって、しごく熱心にすすめる。よかれあしかれ、家康にはない態度だった。

数正を引き抜けば、徳川の狼狽ろうばいは大きいはずだ。数正は国家の枢機にあずかっているのです、軍のこと、政治のこと、民情のこと、すべてがわかる。数正のような有為の男を失う徳川の損失は小さいものではない。のみならず、数正と共に寝返る者が出るかもしれない。

そういうことを秀吉は考えているに違いないが、ただ理屈抜きに、いい家来がほしいので誘い

をかけているフシもある。

秀吉は数正を歓待し、考えておいてくれと言った。

その後秀吉は、さまざまに勧誘の手をゆるめなかったばかりでなく、いくぶん、離間策らしい試みもした。

八月、秀吉の旨を受けて、津田左馬允が浜松城に答礼にやってきた。津田は特に数正に懇切にふるまい、多大の礼をしたり、数正とたびたび密談のようなことをした。だが内容は重大なものではない。せいぜい、数正の決心をうながしたくらいのものである。しかし浜松の家臣にしてみれば、数正と何を話しているのかと疑う。

秀吉から誘われていることを、家康にもだれにも話さなかったのは、あとで考えると、そろそろ心を動かし始めていたせいかもしれない。

ことしの春、小牧、長久手に秀吉と家康が戦った時、秀吉は使いをよこし、数正の金の馬蘭の馬印があまり見事なので、もらい受けたと言った。いかにも物にこだわらない秀吉らしい注文なので、数正は承知したが、秀吉のニヤニヤしている顔が見えるような気がした。馬印を数正に見立てて、早くやってこいと催促しているのだ。

秀吉は馬印の礼にと、黄金を贈ってよこした。これは数正を戸惑^{とまど}わせた。馬印を金で売ったわけではない。秀吉のくれた黄金には、さまざまの意味がこもっているはずである。

人が知らないのなら、もらっておくなり、返すなり、自分の判断でできるが、事は知れわたっている。数正は秀吉と内通しているのではないかという疑いが、群臣の間に広まりかけている時でもある。

とにかく、面倒なことだった。家康に相談すると、これもうるさそうに

「なぜ、わしに聞く。くれたものならば、納めるがよからう」

と言いつてた。なぜか、この時の家康の話を、数正はあとまで忘れることができなかった。それは、無関心さと、つまらぬことを聞くなという不機嫌さとが、ないまぜになった顔だった。ただ家康の目は暗い、ナゾめいた光を宿していた。家康の表情が、大抵の場合、よそおわれたものであることを数正は知っている。

結局、数正は黄金を返却してしまったが、家康は秀吉の誘いを察しているのではないかと思つた。誘いを断わり、疑いを解かねばならぬ。しかし、実際には数正の心は、反対に動きだしていた。

数正の一行は、城内で饗応を受けた。美酒佳肴かこうである。数正は遠慮せずに酔いにまかせた。三河にこんな馳走はない。席に連なった三河武士共はかえって固くなり、料理に毒でも盛られていような手付きで、おそろおそろ味わっている。